

プロジェクト1

昭和史に見る現代スポーツの生成過程と変遷： 女性スポーツの萌芽 戦前の女性オリンピックを中心に

佐竹 弘靖 (ネットワーク情報学部教授)、飯田 義明 (経済学部教授)

現代スポーツの礎を築いた昭和時代のスポーツは、順風満帆な道を歩んだわけではなく、激動の昭和史の中で紆余曲折を経験しながら成長・発展していくことになる。戦前のスポーツ界は種目は限られてはいたもの世界的にも注目される好成績をあげていた。しかしながら、不穏な動きを見せる世界情勢を背景に、遂に第2次世界大戦が勃発する。その前夜、日本スポーツ界は世相にそぐわず衰退の憂き目を見ることを余儀なくされ、苦悶の時代に突入する。特に、戦前は一般に流布する先入観の影響から日常生活はもとよりスポーツの場面でも様々な制約を受けながら多くの女性たちは

不自由さを享受せざるを得なかった。そういった社会情勢にもかかわらず、我が国の女性選手の世界での活躍が国民の意識を大きく変化させる契機となった。

本プロジェクトでは、現代スポーツの生成・発展さらには変遷に大きく影響を与えた女性スポーツの姿を文化的背景や歴史的考察を基に分析し検証しようとするものである。

戦前の我が国のスポーツ界で活躍した女性選手は二人いる。陸上競技の人見絹枝選手と水泳(平泳ぎ)の前畑秀子選手である。人見選手は日本女性初のオリンピックメダリストと

なり、前畑選手は日本女性初のオリンピック金メダリストに輝いた。二人とも引退した後、それぞれに種目の発展に寄与するべく精力的に普及活動に務めている。

研究方法としては人見・前畑両選手に関する資料(国内外の研究論文、書籍、映像、新聞等)を分析するとともに、研究対象となる人物に関わる地元のスポーツ博物館、出身学校、資料館等を訪問し、資料収集にあたる。

研究成果の一部は、令和5年度専修大学スポーツ研究所紀要に投稿する。

プロジェクト2

子どもの身体リテラシー向上プログラムの開発 - 体力・運動能力、保護者の価値観に着目して

相澤 勝治 (経営学部教授)、木村 元彦 (研究所協力研究員)

「子どもの身体リテラシー開発プロジェクト」は、スポーツを通じて「身体リテラシー」を発達させることができるプログラムを、科学的知見を基に開発するプロジェクトである。また、「身体リテラシー」とは、さまざまな身体活動、リズム活動、スポーツ活動などを自信をもって行うことができる基礎的な運動スキルおよび基礎的なスポーツスキルである(日本陸上競技連盟, 2018)。身体リテラシーを高めるためには、身体活動を支えるための体力・運動能力、運動に対する自信である運動有能感、運動スキルのひとつであるコーディネーション能力を高めることが重要である。さらに日本陸上競技連盟は、スポーツが人間の生涯にわたる身体活動の基盤となる身体リテラシーを育むことを報告していることから、児童期から身体リテラシーが発達する取り組みに参加することは、本邦が抱える運動習慣の二極化や運動嫌いの子どもの増加に歯止めをかけるきっかけになると考えられる。

我々はこれまで研究協力者とともに、レスリ

ング競技が発育発達期の小学生の体力・運動能力、学校体育に対する運動有能感や運動習慣にどのような影響を及ぼしているかを中心に研究してきた。その結果、レスリングに取り組む小学生の体力・運動能力は、中学年(小学3・4年生)から性差が現れることや、体力・運動能力の発達特性は性差の可能性があることが明らかになった(木村ほか, 2017; 木村ほか, 2021)。また、レスリングに取り組むことが、レスリング以外の競技に取り組む児童やスポーツや運動を実施していない児童に比べて、子どもの運動有能感を高める効果があることや、体力・運動能力と運動有能感、運動習慣を三位一体として捉えることが、身体リテラシー発達の重要なキーとなることを明らかにしてきた。しかしながら、これらの報告は、小学生のみに視点を当てた研究であり、小学生から中学生への発育に伴った体力・運動能力の発達傾向は報告されていない。また、スポーツに取り組む小学生・中学生の環境は、保護者やスポーツ指導者の影響を多くに受けるこ

とが考えられ、保護者のスポーツ経験や価値観が、子どもが取り組むスポーツの選択に影響していることや、コーチなどのスタッフの指導行動が子どもの心理面に影響を及ぼす可能性が考えられる。我々は2022年度にスポーツに取り組む子どもの保護者へ調査を実施したものの、対象者が少なかったことから、一般化できるデータが収集できたとは言い難い。

そこで、本プロジェクトでは、子どもの身体リテラシー向上における影響因子を2022年度から引き続き分析し、プログラム開発の基礎資料を得ることを目的とする。研究計画としては、全国のレスリング教室の選手及び保護者、及び地域特性を考慮した測定・調査を実施する予定である。評価指標としては、身体リテラシーの評価指標を体力測定やアンケートを用いて検討する。また保護者や指導者に関しては、ヒアリング調査より影響因子を抽出し、身体リテラシーの評価指標及び影響因子について分析する予定である。